

魯山人って何や?!

不幸な生い立ちと名声を得てからの豪放磊落な自由人としての生活が、見事なコントラストをもって語られ、彼の人生をいっそう伝説的なものにした。しかし、それ故に魯山人

彼の才能を認め、パトロンたちの出資によって、赤坂に星岡茶寮を開き、美食倶楽部を発足させた頃から、彼の名声は高まっていった。その作品に魅せられた多くの経済人や政治家は、競って彼の作品を愛で、食に舌鼓みを打った。

紙間屋河路豊吉が魯山人を長浜へ

魯山人は、書画を描き、美食を追求し、自ら料理をつくり、そして料理に使う陶器までつくった希代の風流人であった。京都の社家に生まれながら、母の温もりを受けることなく、捨て子のように養家を転々とした極貧と薄幸の幼少時代。そして、東京に出て、非凡な才能を開花させた大正末期以後の人生。

が自らの芸術的なセンスと素養を培った、明治後期から大正時代にかけての前半生は、あまり知られていない。

実は、魯山人が三十歳の頃、数年間を長浜で過ごした時期があったのである。彼を長浜に呼び寄せたのは、当時長浜で紙間屋を営んでいた河路豊吉だった。店の名を通称、紙平といい、北国街道沿いに店を構えていた。この店は、いまはもうないが、当時の家が残っている。長浜駅前通りから北国街道を北へ少し入ったところにある。ひしたけ旅館の北隣にある町家がそれだ。昭和十年代に河路家から家を買ったという東さんが住んでいる。「魯山人ねえ。この家には、何にも残ってないわよ。向かいの安藤さんには、魯山人が書いた屏風があるけれど」

魯山人は、二十代の後半、朝鮮に渡り、韓国印刷局の仕事をしていた時期があった。この三年の間に、朝鮮や満州、中国の各地を訪ね、古代の石碑や篆刻を見、そこから多くを学んだ。そして、帰国後、東京で書と篆刻の看板を掲げて、仕事を始めた。その作品にぞっこん惚れ込んだのが、長浜の紙間屋、河路豊吉だった。

栖鳳も同時期長浜で絵筆を握った

豊吉の招きにより、食客として河路家に逗留した魯山人は、号を大観と名づけた。大正二年、彼が三十歳のときだ。魯山人と名のるようになるのは、ずっと後年のことである。魯山人は、食客としての自由な生活のなかで、毎日、書や篆刻、刻字看板などを彫って暮らした。豊吉は、作品が貯まると頒布会を催し、近郷の同好者に周旋していた。また、商家などに刻字看板を斡旋して楽しんでいった。



と湖北の関わりを探る



電通の92年生活大預言によると、今年のキーワードは、「美意識革命—いきなるものへ」だそうである。

価値観の多様化は、個人の嗜好の尊重につながり、やがて個人の嗜好の段階から個人の美意識の確立へと進んでいく。さらに進むと、美意識は、個人の枠から解き放たれて、ひとつの共通した美意識として確立される。個人的な選り好みではなく、「いき」というひとつの美意識体系を形成しつつあるというのである。

これほど大袈裟に考えなくても、こう考えれば分かるような気がする。個人で悦に入るのは、どうも「オタク」っぽい。共に美を、豊かさを楽しんでくれる人がいた方がうれしいものである。

自分が大切にしているもの、美しいと思うものを、他の人にも美しいと言ってもらえれば、うれしい。それもたくさんいればいるほど、なおうれしいものである。そんな人とは、一杯やりながら、美意識について語り合いたい気持ちになる。

風流もこの延長上にあるような気がする。お茶を点てる、花を活ける、書をたしなむ、俳句を作る。こうしたことは、何よりも、ひとつの美の体系を共有することであり、共に美について語り合い、美しさを論じあうことにつながっていくような気がする。

一人よがりでは、風変わりではあっても、決して風流とは言わないような気がする。

# 小堀遠州なぜなど事典

小堀遠州は、石田三成とともに、文武に長じた近江武士。長浜が生んだ全国区の人物である。茶の道では、千利休、古田織部と並び、天下第一の巨匠と称されて將軍家の茶の指南をつとめている。能吏、茶人、造形芸術家の遠州は、和歌や書の道にも大きな足跡を残している。茶室や庭園の美では「遠州好み」のこともばある。

あなたは郷土の先哲・小堀遠州について、どの程度ご存じか。なぜなど事典で、風流の人物、遠州の人物像を追ってみよう。

## 遠州の少年時代は？

父の勧めで、少年時代から大徳寺<sup>しんがくそう</sup>春屋宗園<sup>しゅんわ</sup>について禅学をはじめた作介（遠州の幼名）は、十五歳の時（十六歳の説もある）、宗甫の法名を授かっている。このころから禅の修業に入ったとされる。

## 遠州の茶のはじまりは？

作介は十歳のとき、天下の大茶人・利休に会い、秀吉の茶の給仕をしている。十八歳のころからは、利休の精神を根本に置きながら新しい創意を加味した茶の道を開いた巨匠・古田織部晩年の二十年間、じかに教えを受けている。

その織部から奥儀の伝授をうけて一躍茶道会の人気者になる。

## 遠州と作事（庭園建築）のかかりは？

父新介が秀吉の命をうけて伏見城わび所の庭園建築奉行を勤めていた十六歳のころから、茶道とともに興味を持つようになる。實力発揮は一六〇六年（慶長一一）、後陽成院御所の作事奉行の一員に加わったときからとされる。

## 遠州は書を誰から習ったのか？

武芸より内政に手腕を買われて立身した父新介は、早くから作介に書道、歌道、茶道、禅などを仕込んだとされる。

## 和歌は誰に学んだのか？

青年時代の作介は、冷泉為満と木下勝俊に歌道を学んでいる。また和歌のほか、そのころの文化人の中で流行っていた連歌、和漢連句にも興味を持っている。

ちなみに遠州辞世の句は、

きのふといひふとくらしてなすことも  
なき身のゆめのさむるあけぼの

## 遠州の茶の湯の特徴は？

茶室に活ける花は、彩り鮮やかな花より、「わくらは」つまり、枯れ葉や野辺の一輪を用いることが多かったようだ。自然物や自然現象に最も従順な態度をとっており、その心は禅の教義からにじみ出ていると言われる。茶室や茶器は簡素。そのデザインには古典文学への心酔が見られると言われ、巨匠・古田織部から仕込まれた数奇的知識があふれているとも言われる。

遠州は作法の型より、もてなす心を大切にしようで、「心のつけよう常の人にはあら

て完成されたと言われる。

## 遠州の作った庭園の代表作は？

仙洞御所庭園、二条城二の丸庭園、南禅寺金地院の鶴亀庭、南禅寺方丈南庭、孤蓬庵庭園などが有名（全て京都市）。

## 遠州の政治的手腕としては、どんなところが評価されているか？

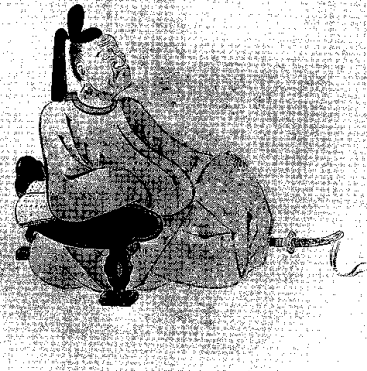
興福寺、東大寺など諸大寺の寺地訴訟の裁断、高野山紛争の裁定のほか、左表のような奉行の経歴を見ても、幕府から高い評価を得ていたことがしのばれる。とりわけ、建築や造園など作事奉行としての活躍が目立つ。寛永年間に入ると、細部意匠に水際立った芸術性を加味したと言われ、皇室関係の作事、江戸城下や畿内各地の將軍居城などの作事で活躍している。

## 遠州には何人の子どもがいたか？

男子六人、女子六人の計十二人の子どもがあった。うち、正室（栄光院＝藤堂高虎の養女）との間の子は、女子三人、男子一人である。

## 遠州という人をひとりで言うとはどんな人？

茶の湯の巨匠、天才建築家、というより「総合芸術家」と言える。茶道、華道、書道、画道、歌道（和歌）、造園、建築、デザイン、彫刻細工、何でもこなした風流の文化人、つまりマルチ人間だった。



▲小堀遠州像  
「常設展示 湖北・長浜の歩み」  
(市立長浜城歴史博物館より)

ざる」と言われたほど、人との交わりを大切にしている。茶道具の多くを自ら製作しており、茶入、茶碗、茶杓、花入、羽箒、棚、筋違、釜、炭などのそれぞれに渋さが光る。

遠州好みの庭園とはどんな庭？  
遠州の庭は華麗な庭でなく、自然を最大限に取り入れているのが特徴。水が流れ落ちていくように錯覚させる枯山水の作庭を多く手がけ、石組や飛石は最小限に抑えている。江戸期から急に多くなった、遠くの山などを庭の一部に取り込む借景庭園は、遠州によっ

年号	西暦	年齢	出来事
天正 7	1579	1	・近江長浜（小堀町）で出生
10	1582	2	●本能寺の変
17	1588	10	・郡山城内で利休と出会い、秀吉の茶の接待
文祿 2	1593	15	・大徳寺で参禅をはじめ
慶長 2	1597	19	●秀吉没 ・藤堂高虎の養女と結婚
慶長 5	1600	22	●関ヶ原合戦 ・父新介、関ヶ原で活躍 備中で14,460石を領す
8	1603	25	●家康征夷大將軍に
9	1604	26	・父病没（65才）、遺領を相続
11	1606	28	・後陽成院御所の作事奉行に
13	1608	30	・禅で「大有」の道号授かる ・駿府城作事奉行に
17	1612	34	・大徳寺に禅修業場「孤蓬庵」興す ・名古屋城天守閣作事奉行に
19	1614	37	●大阪冬の陣
元和 1	1615	38	●大阪夏の陣 ・茶の師古田織部切腹
3	1617	39	・伏見城本丸書院作事、河内国奉行に
5	1619	41	・近江浅井郡小室に移封される
6	1620	42	・大阪城作事奉行に
8	1622	44	・近江国奉行に
9	1623	45	・伏見奉行に
寛永 3	1626	48	・大阪城天守並びに本丸御殿作事奉行
10	1633	55	・仙洞・女院御所御庭泉水奉行 ・自宅でひんばんに茶会を催す
12	1635	57	●参勤交代が制度化
15	1638	60	・この年の前後、いっそうひんばんに茶会を催す
19	1642	64	・4年間の江戸詰はじまる
正保 4	1647	69	・2月6日伏見奉行屋敷で死去 大有宗甫・孤蓬庵と号す

森 羅著「人物叢書 小堀遠州」から